

氏名	姜 智仙
学位の種類	博士 (美術)
学位記番号	第 69 号
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
論文題目	現代生活空間における朝鮮民画の吉祥性の展開
審査委員	主査 教授 滝口 洋子 教授 吉田 雅子 教授 辰巳 明久 教授 塚田 章 山本 俊介 (高麗美術館研究所学芸員)

## 論文の要旨

私は自分のルーツを見つめ直し、韓民族の美意識を基にした独創的なデザインを行うことを目指している。そのため、朝鮮民画をデザインの観点から解釈し、現代の生活画を描き、それを生活空間へ積極的に展開してゆく。

グローバル化が急速に進んでいる現代、様々なメディアの発展により各国の情報を簡単に手に入れることができ、文化やデザインの均一化が進んでいる。それ故に各地域や民族固有の文化的要素を生かそうとする世界的風潮がある。文化の時代ともいえる 21 世紀では、自分自身の民族文化の本質を表現することが、翻って世界に通じる道を拓くことになるだろう。

韓国民族の情緒がよく込められていると言われる朝鮮民画は、朝鮮時代を中心に実用目的に描かれた生活画である。正統画法から離れ自由奔放に表現されていることから、民画は長らく俗画と呼ばれ美術品として認められなかったが、現代においてその自由な表現が認められ、高く評価されるようになった。

朝鮮全土に民画文化が広がった理由の一つは、その吉祥観のためである。朝鮮民族は「恨 (ハン) の民族」ともよく呼ばれている。「ハン」という言葉は恨みを意味するが、言葉では言い切れない様々な感情を意味する。多くの国の侵略や内乱などの痛み、儒教思想の階級意識に基づく差別の恨み、男性中心社会での差別される女性の恨みなど民族の思いがある。しかし民画の中にはそのようなネガティブな感情は感じられなく、むしろそれを克服しようとする強い意志が感じられる。朝鮮民画には誕生、成長、結婚、還暦に至るまで人々の根本的な祈りがあり、幸せで健康な生活、家族の団欒、立身出世などが表されている。精神的にも肉体的にも大変だった時代に民画は人々の夢であり、朝鮮の人達が明るく前向きに生きていく原動力のような役割を果たした。

現在韓国では、民画をデザインに展開する動きが少しずつ出てきているが、民画を表面に貼り付けた土産物のような商品が大半で、現代生活にふさわしい商品開発はまだ行われていないのが現状である。そこで私は、朝鮮民画の本源に立ち返り、現代の生活画を描き、それを現代生活の中に展開することを目指

した。民画の表面的な再解釈だけでなく、その本質を生かすような表現を行いたい。現代を生活している私の感覚を通して、同時代を生活している人たちに朝鮮時代から人々に受け継がれてきた民画の持つ幸福感を伝えたいと考えた。

そこで、私は朝鮮民画の諸概念、伝統文化を生かしたデザイン、デジタル・テキスタイル・プリント等の技法に関して調べ、関連事項を整理した。その上で、それらの内容を生かしながら、「牡丹と怪石」「富貴栄華」「孝悌文字図 I」「孝悌文字図 II」「スター」「立身出世」「虎と鶴」「鶏」「石榴」「踊る鶴」「牡丹と鳥」の計 11 点の主題を設定した。そしてそれぞれに対して原画を描き、その原画に基づいて結婚式招待状、テーブルナプキン、ソファ、クッション、照明器具、寝具、椅子、宅配ボックス、建築空間等を展開した。これらの制作は、現物作品のものもあれば、シミュレーションのものもある。

以上の制作において、私は朝鮮民画の吉祥主題、モチーフ、象徴性を使用した。誰が見ても朝鮮民画だと一目でわかるような構図やモチーフの表現は行わなかった。また、民画の強烈な原色や補色の組み合わせをそのまま用いることはせず、それを現代の生活空間に合わせてアレンジし、パステルカラーや明るく楽しい配色に置き換えて展開した。

私は、アナログ的な手作業とデジタルのプリント技術を組み合わせて、従来の手作業のみの仕事や、デジタル処理主体の仕事では表現できない制作を行うことを目指した。そのため、3つの制作プロセスを取った。まず、STEP 1 では、民画の吉祥性を富貴、教化、幸運、親睦、健康の5つの項目に分け、それらを主題として自由に絵を描いた。

次に STEP 2 で、原画をデジタル化し、デジタル・テキスタイル・プリントの技術を用いてリピート・パターンを制作した。この技術は、手描きの繊細なニュアンスが再現でき、多色が自由に使え、モチーフやリピートの大きさを自由に変えられる。私はこれらの表現上の特徴を生かしたデザインを展開した。

さらに STEP 3 で、展開アイテムに合わせてパターンの大きさや色彩、構図等を調整した。私の制作は布地へのプリントが中心だが、ジャガード織機を用いた織物や、金属にデジタルエッチングするなど様々な素材や技法に展開も試みた。さらに、カード等の紙媒体や建築空間等にもデザインを展開した。

その結果、「牡丹と怪石」の招待状は、「Chorongbul Card」という韓国の会社のコンペティションで選ばれ、現在実売されている。また「牡丹と鳥」は、つくるビルというアトリエビルの壁面に実際に展開した。

私の作品について、人々は「幸せ」「甘い」「楽しい」等の印象をもつという。その源泉には、民画の持つ幸福感がある。私はこのような民画の本質を生かしながら、現代生活空間に適合した表現を用い、民画の吉祥性を解する東アジアだけでなく、文化的背景が異なりモチーフの吉祥性を解さない人々にも共感されるデザインを行ってゆきたい。今後も、19 世紀の庶民の民画ではなく、21 世紀の市民の生活画である民画を生活空間の中に展開してゆきたい。

## 審査結果の要旨

姜智仙さんの制作の一番の特徴は、民画をモチーフとした原画制作のみならずそれをデジタル手法を駆使してアレンジを行ない、民画のもつ吉祥性や民族の心をひろく世界の人々に伝えようとしている点である。19世紀の民画の再解釈ではなく、21世紀に生きる人々の為の民画を現代の生活空間に展開することを目指している。

朝鮮民画とは本来美術品として鑑賞する対象ではなく、朝鮮時代（1392～1910）民衆の生活のなかで儒教思想を背景に吉祥を願って使われた実用的な絵であり、屏風として使用されたり部屋の内外に貼られたり直接描かれたりした。人の誕生・成長・結婚・還暦といった儀礼を祝う装飾として、また「邪」を追い払い「長寿」や「多福」など豊かで健やかな生活を祈るために使われてきた。そこには「ハン（恨み）の民族」といわれる朝鮮の人々の悲しいイメージはみられず、前向きな意志や夢、幸福などの明るい表現に溢れている。

2005年に来日し修士課程でビジュアルデザインを学んできた姜さんは、日本で新しいデザインについて学ぶほど自身の民族やその伝統文化、アイデンティティについて深く考えることになったという。自分にしかできないオリジナルな表現を求め、自分の心と身体の奥深くに刻まれている確かな記憶に眼を向けていたとき偶然民画に出会った。その奇抜な視点と構成、諧謔味あふれる表現、自由で鮮やかな色彩に自分の作品との共通点を見だし、博士課程での研究テーマとした。

その制作プロセスは3つのステップがある。

第1のステップでは、民画のもつ吉祥性から彼女が現代にも通じると抽出した5つのキーワード「富貴、教化、幸運、和睦、健康」をもとにキャンパスに絵を描く。描くときには自由な表現を最優先しており、サイズも表現技法も様々である。

第2のステップでは原画をデジタル化し、汎用性の高いリピートパターンを制作する。デジタルテキストスタイルプリントの技法を応用したこの方法は原画のもつ手描きの繊細なニュアンスが再現でき、モチーフやリピートも自由に変更できる。

第3のステップではじめて具体的な展開を考察し、使用される条件に相応しいサイズや材質、さらに色彩や構図などを決定して第2のステップで制作したパターンのアレンジを行なう。

一枚の絵画から平面の各種メディアへ、さらにリピートによってエンドレスにひろがるファブリックを中心としたインテリアデザインやプロダクト製品のサーフェスデザインへ、そして室内外の空間など環境デザインの分野へ、というように多岐にわたるモノ造りがなされている。原画制作では手作業による豊かな表現を行ない、その後の展開では2次元だけでなく3Dのモデリング、空間シミュレーションといったデジタル手法を駆使してデザインの可能性を見極める点など、デザイナーとしての守備範囲は極めて広い。そしてそれらが提案のレベルで終わることなく現実社会で実践されている点も実技をベースとする本学博士課程の研究として意義深いことである。

例えば五条通りのリノベーションされた「つくるビル」の壁画やサインデザインの仕事など、建築空間

への展開でも高い評価を受けた。老朽化したビルを若いクリエイターのためのアトリエ、ショップ、カフェ、ギャラリーなどに再生させる計画で、その計画の成功や入居者の活躍を願って制作された。また韓国での宅配ボックスのデザインも実現すれば彼女の現代的な民画の吉祥性を都市空間に取り入れたよい例となるであろう。

このように様々なメディアに展開するとき重要な役割を果たしているのが独自の色彩感覚である。民画本来の強い色調とは異なるパステルトーンやブライトトーンが多用され、明るく軽快な印象を与える。民画の精神である祈りや願い、夢をそれらの色彩に置き換えて表現することで民画の背景にある故事の内容やモチーフの象徴を理解できない人たちにも吉祥のメッセージを伝えることができる。それらの色彩とユニークで暖かみのある動植物のフォルムや構図によって現代感覚に溢れる作品に仕上がっている。

グローバリゼーションが進み、世界的に文化が均一化しつつある現代ではそれぞれの民族の伝統文化を再評価する動きも同時にみられるようになってきた。民画は韓国で朝鮮の人々の心の絵画として見直されているが、その吉祥性や幸せを祈る気持ちは文化圏の異なる地域の人々にも理解されると思われ、今後韓国を代表する文化として広く世界の人々に受け入れられるだろう。

韓国の民画協会などからも彼女の活動は注目されており、日韓両国ともにコラボレーションの依頼が後を絶たない。学術的な調査研究や論文執筆と制作活動が大変よい相乗効果を産んでおり、本研究は博士課程の制作研究の理想的なかたちであると審査員全員で合格と判定した。